らるゝに、きかせ給はぬやうにてあらんと、おぼしめしけるにこそとこゝろえて、たちたまひけるげにかばかりのいはひの御事、またけうになりてとまらんも、いま〳〵しきに、やをらひきくしてあるべかりける事を、心もなく申ものかなと、いかにおぼしめし候らんと、後にぞその殿もいみじく悔しがり給ひける、

〔古事談二臣節〕俊賢卿蒙中關白○藤原道隆恩、五位而補藏人頭、越多人、思此恩而入道殿○藤原道長蒙内覽宣旨給日睡眠云々、傷帥殿○道隆子伊周事之故云々、ソラヲブリウチシテキタリ、帥内大臣事故云々、

〔枕草子二〕にくきもの

家にても、みやづかひ所にても、あはでありなんとおもふ人のきたるに、そらねをしたるを、わがもとにあるものどものおこしよりきては、いぎたなしと思ひがほに、ひきゆるがしたるいとにくし、

〔源氏物語八花宴〕きりつぼには、ひと〳〵おほくさぶらひて、おどろきたるもあれば、かゝるを、さもたゆみなき御忍びありきかなと、つきじろひつゝ、そらねをぞしあへる、

〔古今著聞集十六興言利口〕此比天王寺よりある中間法師、京へのぼりける道にて、山ぶし一人、又いもじする男一人行つれて上りける、○中略人し、づまる程に、此山ぶしおきゐて、かみをもとゞりにとりけり、いもじ男はたゞよくねいりぬ、法師はそらね入して、此山ぶしがふるまひ見ゐたる程に、○下略

〔明良洪範七〕源藏ハ二ノ丸ヘ行キテ、空眠リシテ半藏ノ來ルヲ待ケル、

〔書言字考節用集八言辭〕絡睡タヌキネイリ事見二本草綱目一

〔名物六帖人事四體勢作用〕假睡タヌキネイリ水滸傳、婆娑聽得是宋江回來、只做二鼾鼾假睡著、

佯睡タヌキネイリ冷齋夜話、王文公居二鍾山一、與二俞秀老一、至二報寧寺一、有頃秀老至公佯睡、

陽眠タヌキネイリ宋書顏延之傳、何尚之在直、延之以醉詣焉、尚之望見便陽睡、